

## 書評 Book Review

***Against State, against History:  
Freedom, Resistance, and Statelessness in Upland Northeast India,***  
by Jangkhomang Guite. New Delhi: Oxford University Press, 2019. p. 302.  
ISBN978-0-19-948941-1

浅田 晴久\*

評者はインド北東地方のアッサム州において、自然と社会の関係について地理学をベースとしたフィールドワークを10年以上続けている。低地の農村で調査をしているとき、ふと視界を上げると遠くに見えるのが東ヒマラヤの青々とした山稜である。そこは地理的、歴史的な条件から、西洋文明から距離を置いていた地域の1つであり(安藤, 2020)、低地社会からは完全に断絶された異世界ゆえに、自分の研究対象にはなりえない地域であると評者は考えてきた。これまでメガラヤ州やアルナーチャル・プラデーシュ州など山地に足を踏み入れる機会も幾度かあったが、そこで目にした光景はキリスト教の教会、焼畑の耕地、女性が多数を占める市場など、やはり低地社会に親しんだ者としては理解できないものばかりで、調査の合間に観光目的で訪れる場所以上としての関心が向くことはなかった。

本書との出会いはアッサム州グワハティ市内の行きつけの書店でみかけて、たまたま手に取ったことによる。本書のタイトルを見て、誰しものが思い浮かべるのが、ジェームズ・C・スコットの『ゾミア：脱国家の世界史』(原題は *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*)であろう。東南アジア地域研究では、この10年ほど「ゾミア研究」がブームの様相を呈しており、東南アジア大陸部山地地域の特性、およびそこに暮らす少数民族の素性を明らかにするために、こぞって研究会やプロジェクトが立ち上げられている(たとえば、今村, 2016)。一方で、同様の研究は南アジアでは必ずしも盛り上がりを見せておらず、山地社会については個別の事例が断片的に報告される程度である(たとえば、McDuié-Ra, 2016)。特に日本人を含む、外国人研究者にとっては調査ビザの問題もあり、インド北東地方のゾミア地域

の実態は謎に包まれた状態が続いていた。

本書は、マニプール州出身の近代史家によって書かれた、管見の限り、インド北東地方を対象とした初の本格的なゾミア研究書である。歴史学の研究書であるため、本書で取り上げられるのは現代の山地社会ではなく、イギリス植民地支配が及ぶ19世紀半ば以前の山地社会である。なぜ、現代の低地社会の地理的な事象に関心をもつ評者が本書を紹介するのか。それは本書がインド北東地方の山地の地域性を扱っており、比較のために低地社会の特性についても随所で論じられているからである。本書の登場により、南アジア世界の低地から山地、さらには東南アジア世界まで連続的に地域の特性を比較・考察することが可能となるため、書評の形で記録に残しておく意義は大きいと思われる。個人的には書店でページをめくった際に、数編の地図が目飛び込んできたことも決め手となった。本書は歴史学者の視点から山地全体の特性が論じられているが、地理学者にとっても大いに参考になる知見が散りばめられている。

それでは本書の内容を紹介する。本書は序章とそれに続く9つの章から構成されている。

序章では、本書の要点と目的が40ページに及んで丁寧に記載されている。著者の目的は、住民の目線でインド北東地方の山地社会の歴史を描くことで、「周辺に暮らす民族」という文明世界で支配的な言説を相対化することにある。文字をもたない民族の歴史を復元するために利用されるのが口頭伝承である。山地社会では口頭伝承が豊富に残されており、いずれの民族も自分たちが現在とは別の場所、つまり、隣接する低地から山地に移住してきたという伝説をもつ。彼らは何らかの原因で山地という避難場所に逃げ込んだ住民ないしはその子孫とされる。本書で扱われる山地とは、

\* 奈良女子大学大学院人文科学系

地理的にはヒマラヤの東端にあたり、ブラマプトラ川、ボラク川、チンドウィン川に挟まれる高所を指す。ここは19世紀末まで国家の支配が及んでおらず、低地民が侵入するのも容易ではなかった。そのために英領期の探検記に多数の記述が残されており、本書でも随所に引用される。本書で繰り返し強調されるのは、山地社会は低地社会とは切り離されていたが、完全に独立の文化が発達したわけではないという点である。村落立地、政治体制、社会関係、資源利用など、日常のあらゆる場面で低地との関係、つまり低地の支配に抵抗する要素がみられるのである。本書の大枠を理解したところで、次章以降で個別の要素についての考察がなされる。

第1章では、山地社会の説明に入る前に、山の民がかつて住んでいたとされる低地社会について説明がなされる。特に植民地化以前、現在のアッサム州に存在したアホム王国(1228-1826)を事例に、国家の中心と周辺の対比が説明される。従来の歴史学では国家の中心地域の説明に重点が置かれた一方で、人口希薄で技術が普及していない周辺地域の記録は棚上げにされたままであった。アホム王国の場合、徴税制度、軍隊組織などが広く知られており、周縁部にいた民族を武力で制圧して、奴隷として国家の中心付近に住ませる努力がなされた。成人男子に土地を割り当てて、米、サトウキビ、カラシナなどを栽培させ、他地域への移動は制限された。土地面積当たりの人口が少なかったアッサム平原では、いかにして土地を耕す人口を確保するかが国家の課題であり続けてきたのである。しかし中心に人を集めようとする求心力が働くと、国家権力を嫌って周辺に逃げ出そうとする遠心力も同時に働くことになる。低地から山地に逃れた一団が、本書の題名にもある、「国家に逆らい、歴史に逆らった人々」である。彼らにとって山地は、支配と抑圧から自由になれる場所であった。

第2章は、山の民がなぜ、どうやって、現在の場所まで移動してきたのかを、口頭伝承から復元する試みである。インド北東地方のトライブの大半は、チベット=ビルマ語族に属する。言語学・人類学研究により、彼らの起源はチベット北東部、中国南西部、ビルマ北部で、かつヤンツェ川、メコン川、サルウィン川、イラワディ川の源流付近と判明しているが、起源地からの移住経路については議論が続いている。たとえば、ボドは言語学的にみると、パトカイ山脈を越えて東のミャンマーからインドに移動したと比定されるが、彼らの伝承では、北のチベットからヒマラヤ山脈を越えてやってきたとされている。他にも、アッサム平原で

高度な文明を築いていたにもかかわらず、アホムの侵攻を受けて、ヒマラヤの山麓に移住することを選択したカチャリもいる。ガロ、カシ、タニ、カルビ、クキ・チン、ナガなど各民族の移住史が考察され、いずれのトライブも強大な権力に追われて、険しい山地、疫病はびこるテライ丘陵、峡谷、沼沢などに逃げてきたとされる。トライブの移住場所については、中心からの隔絶性に加えて自然環境も関係しており、地理的な要因が大きいという。

第3章では、山の民が認識する空間と領域について考察される。主題図・模式図が5枚掲載されており、本書でもっとも地理的な要素が強い箇所である。山の民の空間認識は、低地民とはまったく異なり、著者はclan geographicityとよぶ。それは、居住地、保全林、耕地、聖なる森、狩猟地など、彼らの日常生活における空間利用が反映されたものであり、普段は散らばっている集落が、必要に応じて協力して共通の敵に立ち向かう、という社会・文化的ネットワークがそこに形成されている。実際に19世紀前半まで、山地の中に大規模な集落が設立されることはなく、人口は分散していた。人々は肥沃度が低く、地形が険しい場所に集まる傾向があった。これは経済的には不利であっても政治的優位性をとる山の民の戦略であり、険しい山地に分散して住むことで、低地からきた征服者にみつきにくくなる利点がある。トライブにとって空間とは、経済的資源だけでなく、社会的・文化的・政治的資本でもあるというのが著者の見立てである。

第4章は、国家に属さない山の民が、いかに低地国家の支配から自由を守り抜いたかについて、空間的な側面から考察される。近年の歴史学の研究により、インド北東地方の山地は移動を妨げる障壁でも低地から切り離された社会でもなく、文化、商品、人々が集まってくる「コンタクトゾーン」の性格を有することが分かってきた。山の民は低地の支配から逃れるために、山中に道をつくろうとはしなかった。しかし、低地民に見えないだけで、実際にはツタでできた橋や、1人がやっと通れるほど狭い轍など、通行困難で危険な「道」が多数つくられてきた。その道を通るのは、結婚する男女、その家族、求婚者、愛人、仲人、戦士、儀式参列者、贈答者、などの人々、モノ、文化であり、集落間で交換されることで社会的・文化的なネットワークが成立していた。つまり、山地では、文化交流と防衛の双方を考慮して道をつくる必要があった。低地国家への抵抗という視点を導入することで、丘陵の地形を活かしてトライブが高度な空間利用を発達させてきたことが分かる。



第5章は、山の民の経済活動を、富、時間、労働などの観点から読み解く。山地の経済活動の中心は焼畑であるが、低地民が抱くイメージは、重労働、常態化する食糧不足、低水準の技術力といったものである。一方で、山の民は積極的に他者に施しを行い、多大な費用をかけて盛大な饗宴を催す慣習をもつことで知られている。貧しいのに散財するとはどういうことなのか。これは山の民にとって富とは経済的な蓄積ではなく、社会的・文化的資本の蓄積であると理解することで説明がつく。平等主義の規範を有する山地社会では、個人で蓄積した財産を共同体の構成員に再分配する者は、現世では名誉が得られ、さらに来世の安楽も約束される。飲酒、儀式、施し、饗宴、祭りに多額の支出をできるほど、彼らは余剰生産物に恵まれていた。この豊かな生活様式には、生活に必要なあらゆるものを生産できる焼畑の様式が関係している。焼畑では毎年耕地が移動され、使用される道具も少ないので、外部からの支配を受けづらい。収穫されたイモを地中に残しておくことで、イギリス人の攻撃に遭っても生き延びることができる。これは、東南アジア山地社会におけるスコットの議論でも指摘される点である。

第6章は、山地社会の政治システムについての説明である。植民地の官僚たちは、山地社会の首長は専制的な権力者で住民を半奴隷の状態で扱っていると想定していたが、現実には山地に専制政治は存在しなかった。集落の首長には共同体のリーダーの役割が与えられているだけで政治的権力はなく、若者、子ども、女性を含むすべての住民に政治参加の機会が保証された民主主義が実現していた。ゆえに、低地国家は首長を通して丘陵社会を支配することができず、よその集落に支配力を広げることができなかった。半奴隷の慣習についても、山地のトライブ社会にはある種の住民束縛があったことは確かだが、その実態は奴隷制にはほど遠く、罪を犯したり、借金を抱えたりした者が有力者の家に逃避して一定期間保護してもらうものであり、これは流動性・開放性が高いトライブ社会特有の現象でもあった。抑圧的な低地国家との対比で、流動的な山地社会では自由と平等が実現されていたことがさまざまな事例をあげて紹介されるが、どれも我々の常識をことごとく覆す内容であり、頭の中で消化するには時間を要する。

第7章は、山の民の口頭伝承の中に秘められた、権力や権威に関する言説が探られる。文字をもたない民族にとって、家庭内の会話、集会のスピーチ、農作業中の雑談、独身男女が集まる小屋でのうわさ話など、生活のあらゆる場面で言説が生成・共有される。口頭

伝承の中でも、特に民話は社会の価値規範がよく現れており、山の民の潜在的な意識を汲み取ることができる。各民族の民話に共通するのが、トラのような動物で形容される侵入者と、不思議な能力を使用できる英雄の存在である。民話では弱いもの、小さい者が、大きくて強い者を打ち負かすという共通のストーリーが語られる。ここに、虚栄心や支配を嘲笑い、平等主義を希求するイデオロギーを読み取ることができると著者は指摘する。また、やがて過酷な時代が到来するという予言も広く信じられている。これも低地国家の支配を警戒する山の民の心理の表れとみなすことができるという。専門外の評者にはその解釈がやや強引に感じる箇所もあるが、口頭伝承の中に先祖代々の逃避術が秘められているという見方は興味深いものがある。

第8章では、山地社会における女性の地位が検証される。家父長制の山地社会の中で、どの程度の権利と自由が彼女たちに認められていたのだろうか。民話や伝説の中でも男性はその勇敢さを称えられる一方、女性は何ももたない存在とされる。しかし現実の山地社会では女性は、男性と同等の自由と権利を享受していた。女性の労働時間は男性と同じであり、特に結婚前の女性は自由に相手を選ぶ権利が認められていた。ここで、奇妙な慣習として「花嫁の値付け」が紹介される。一族・クランの地位に応じて花嫁に値段が設定され、結婚を希望する男性は義理の両親に金を支払わないといけない。ヒンドゥー社会でみられるダウリーとは金が流れる方向が反対である。「値段が高い」女性と結婚すると男性の社会的地位が上がり、他の男よりも優位に立つことができる。トライブ社会では、離婚・再婚にも制約がなく、女性が夫が気に入らない場合は、婚資を返すことで男性と別れることができる。離婚の自由も、国家をもたない社会の、ある種の反体制文化とみなすことができると著者はいう。低地のヒンドゥー社会とは相当、女性の地位が異なるようである。

第9章は、再び山地と低地の地理的な関係性にテーマが戻ってくる。山地社会は歴史的に低地社会と対立してきた、というのが植民地期に支配的な言説であり、今日でもそのように信じられている。しかし山の民が孤立して生き延びることは不可能であり、生活必需品を低地に依存している。その関係が顕著に表れるのがアッサム語でポサと呼ばれる山地と平地の間の交換メカニズムである。ポサとは低地民が山の民に、布、米、家畜などの収穫物や労力を提供する慣習である。低地民にとっては、ポサを提供することで、山地からの襲撃を避けることができる利点がある。この取引が実施された場所をポサランドと呼び、山地と低地の緩衝地

帯の役割を果たしている。山の民にとっても、低地から必要なモノを持続的に入手すると同時に、緩衝地帯を置くことで低地の支配が山地に及ぶことを避けることにもつながる。この領域はまた、山の民が冬季の寒冷気候を避けるために下りてきたり、戦乱が起こった際に低地民が一定期間身を潜めたりと、双方にとって必要な空間であった。山地と低地を分け隔てていたのは険しい山地と密林という自然の障壁であったが、それは双方の分断を招くものではなく、むしろ互いの差異を縮める空間であった。

結論は約5ページと短くシンプルである。インド北東地方の山地に住むトライブを、原始的、静的で前時代の生き残りともみえず証拠はない。彼らはあえて国家と歴史をもたない生き方を選んだ人々であり、彼らの社会は、近代国家とは違う方向を目指して発展を続けている。国家から遠ざかることで、個人の権利と自由が保障される平等主義社会へと向かっている。最後に、現在のインド北東地方の山地では、民族間の対立と人道危機が生じていることを忘れてはならないと釘を刺して本書は結ばれている。

本書は山地社会の特性を相対化するという当初の目的を見事に達成している。植民地官僚の手による膨大な記録やトライブの口頭伝承を渉猟し、そこからエッセンスを抜き出して、非国家社会の潜在意識を前景化する著者の力量は圧倒的であり、最初から最後まで一気に読み通すことができた。さらに、歴史の分析だけでなく、地理的環境を下敷きにすることで、山地社会の構造を立体的に説明すると同時に、自らの主張に説得力をもたせることに成功している。著者が本書で問いかける主題とそれに対する答えは明快であり、取り上げられる事例の分析もおおむね納得のいくものである。その上で、評者が気になった点を2つあげておきたい。

1点目は、低地国家の支配から逃れて、自由と平等を重んじる山地社会という解釈に際して、著者の主観、さらに踏み込んでいえば、こうあってほしいという願望がかなり入っているのではないかと懸念である。本書は、文明世界の側からみると山地社会は原始的で遅れた生活をしている、という従来の言説をひっくり返すために、とにかく山地社会が美化されて描写される。居住立地、生業様式、民話など、さまざまな題材をもとに、トライブが山地に住む意味を当事者の視点から読み解いているが、英領期に書かれた史料の解釈がメインであるため、本書で述べられていることが、実際に当時の山の民が意識してとっていた戦略であるのか、読者が見極めることは困難である。現代の

我々の頭で考えて納得できる論理で、19世紀のトライブの認識を演繹的に推測してよいのか、もう少し慎重に判断する必要があるのではないだろうか。

2点目は、本書で書かれている内容と結論が、スコットが『ゾミア』で明らかにしたこととどのように違うのか分からない、つまり東南アジアと南アジアの地域的な差異が明確にされていないことである。本書で明らかにされた、国家からの逃避術としての山地民の地理的周縁性、移動性、焼畑農耕、流動的な社会構造、平等主義などは、すべてスコットによって指摘されていることである。「ゾミア」は東南アジアだけでなく南アジアの山地部、さらにチベット高原にまで広がっており、民族的にもチベット=ビルマ語族という共通性があるので、両者の結論が同じであってもおかしくはないかもしれないが、東南アジアと南アジアでは、地理的にみても山地および低地の自然環境の特性は異なり、歴史的にも、低地の支配国家の性格・形態は異なっていたと思われる。特にアホム王国があったアッサム地方は、歴代帝国が栄えた北インド平原とは明らかに性格が異なり、それ自体が周縁的な性格を有している地域である。南アジアの地理環境に関心があり、かつインド北東地方の地域研究を専門とする評者の関心からすると、本書の結論にはやや物足りなさを感じる。ゾミア研究の1つとしても、インド北東地方の事例を分析することで、従来の理論にどのような形で貢献しているのか、あるいは修正を強いるような箇所が発見されたのか、そこを丁寧に議論する必要があったのではないだろうか。

以上、気になった点をあげたが、決して本書の価値を損なうものではなく、本書を出発点として、後進の研究者が事例研究を重ねて理論を精緻化していけばよいだけのことである。本書は基本的には山地研究の専門書であるが、比較のために低地社会の特性も随所で論じられており、インド北東地方の低地地域に関心がある評者にとっても参考になる部分が多かった。なにより、なぜ評者がこれまで山地社会に関心を抱くことができなかつたのか、その手がかりを得ることができた。それは、評者のような低地で生活している者に必要以上に関心を抱かれて自分たちの生活の場が荒らされないように、山の民が意図的に仕組んだ戦略であったのだ。

## 文献

- 安藤和雄 (2020) : 『東ヒマラヤー都市なき豊かさの文明—』  
 京都大学学術出版会。  
 今村真央 (2016) : 東南アジア山地研究は地域研究として成り

立つのか？. 東南アジア研究, 53, 279-286.

スコット, J. C. 著, 佐藤 仁監訳・池田一人・今村真央・久保忠行・田崎郁子・内藤大輔・中井仙丈訳 (2013): 『ゾミア—脱国家の世界史—』 みすず書房.

McDuie-Ra, D. (2016): *Borderland City in New India: Frontier to Gateway*. Amsterdam University Press, Amsterdam.

(2020年10月26日受付)